

國學院大學學術情報リポジトリ

地方改良運動で「優良」とされた通俗図書館の実像：
埼玉県比企郡八和田村私設千野図書館を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-26 キーワード (Ja): 通俗図書館, 地方改良運動, 私設千野図書館, 千野幸三郎 キーワード (En): 作成者: 新藤, 透 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000106

地方改良運動で「優良」とされた 通俗図書館の実像

—埼玉県比企郡八和田村私設千野図書館を中心に—

新 藤 透

キーワード

通俗図書館 地方改良運動 私設千野図書館 千野幸三郎

要旨

わが国の図書館史で画期となる時期はいくつか存在しているが、日露戦争後に内務省主導で実施された地方改良運動もその一つで、全国に通俗図書館が数多く開設された。地方改良運動によって設置された通俗図書館はかなり小規模なものが多く、施設も小学校や寺院などの一室を間借りしたものが目立ち、管理者も個人的に図書館に関心がある小学校訓導が兼務しているところも多数を占めていた。

この運動が起こった背景として、日露戦争が挙げられる。大国ロシアに勝利したことで国民に自尊心が芽生え、世界の「一等国」の仲間入りを果たしたという「大国意識」が発生した。地方改良運動は、「一等国」にふさわしい国民を「養成」するために行ったといえる。

では地方改良運動で開館した通俗図書館は、具体的にどのような活動を行っていたのだろうか。個々の図書館に着目して図書館活動を分析した研究は、管見の限りでは多くを見出すことはできなかった。従来の研究では為政者の動向が中心に研究が進められ、地方改良運動で設置された通俗図書館の個別事例の検討までは及んでいなかったのである。

このような先行研究の傾向を踏まえ、本稿では、内務省がまとめた地方改良運動の優等事例集から図書館のものを取り上げ、どのような図書館が「優等」とみなされたのか、

優等事例集に採録された図書館から一館を抽出し、その設立目的と活動を分析し、内務官僚たちが掲げた目的が、図書館の現場で実現されていたのか検討を行った。

さらに埼玉県比企郡八和田村の私設千野図書館を事例に取り上げて、設立経緯、蔵書、利用状況、図書館活動を中心に分析を行った。設立は小学校教員である千野幸三郎が私財をなげうって設立したもので、所蔵している文学書は和漢の古典的な作品が多く、当時流行していた小説がほぼ所蔵されておらず、娯楽よりも修養が目的であったことが窺えた。利用状況は当時としては高い利用率を誇っていたが、おそらく青年団員を動員しての読書会などの行事による利用者数だと思われる。図書館活動は講演会、幻灯会などを行っていた。これらの目的が、読書によって知識を高め、品位を向上させるものであり、内務官僚が掲げた目標が実行に移されていることが確認された。

1. はじめに

わが国の図書館史で画期となる時期はいくつか存在しているが、日露戦争後に内務省主導で実施された地方改良運動もその一つで、全国に通俗図書館が数多く開設された⁽¹⁾。この運動が起こった背景として、日露戦争があげられる。有色人種としてはじめて白人の国家に勝利したことは、当時世界中の有色人種たちに希望を与えたといわれている⁽²⁾。その一方で、日本国内では大国ロシアに勝ったことで国民に自尊心が芽生え、世界の「一等国」の仲間入りを果たしたという「大国意識」が発生した。

有泉貞夫が執筆した『国史大辞典』の記事によれば、地方改良運動とは「日露戦争後に、日本が帝国主義列強に伍していくための国力増進策の一環として、町村財政と生活习俗の改良をめざした国家官僚の試み」であり、内務省が主導して推し進めた、としている。

後に内務省は地方改良運動が「成功」した「各地の模範村を顕彰し宣伝する印刷物」を大量に配布した。運動の内容は非常に多方面にわたっているが、なかでも本稿と関連が深いのは通俗教育（社会教育）と風俗改良である。その推進機関に図書館が担わされたという。有泉は「運動は大正に入るところから下火になり、伝統的习俗の破壊を加速したほかは、その効果は確かめがたい」としつつも、「こののちも経済危機・社会不安が深刻化するたびに国家官僚により繰り返される国民精神の引締めと経済自力更生を促す地方への働きかけの原型となった」と指摘している⁽³⁾。

地方改良運動によって設置された通俗図書館はかなり小規模なものが多く、施設も小学校や寺院などの一室を間借りしたものが目立ち、管理者も個人的に図書館に関心がある小学校訓導が兼務しているところも多数を占めていた。

このように地方改良運動と図書館は密接な関係があるのだが、図書館に視点を据えた地方改良運動の研究はさほど多くない⁽⁴⁾。またこれらの研究は、地方改良運動が通俗図書館建設を推進した理由として、国民を「教化・善導」する機関であると結論づけていた。

一方、筆者は拙稿で地方改良運動を推進した内務官僚（井上友一、水野錬太郎、田子一民）の言説を検討し、同運動で図書館建設を推進した目的を次のようなものであると指摘した⁽⁵⁾。

地方改良運動は内務省が図書館設置を奨励したが、その意図は読書によって日本国民の品位を向上させ悪癖や悪習を除去して道徳心の育成、また地域住民の自学自習施設として図書館を活用することにあつた。

『国史大辞典』の記事や先行研究では、国家による国民統制の視点が強く出ているが、少なくとも通俗図書館建設に関しては、「読書による人格形成、品位向上、悪習の排除」が目的だと思われる⁽⁶⁾。

では地方改良運動で開館した通俗図書館は、具体的にどのような活動を行っていたのだろうか。筆者が指摘した目的に沿った活動が実際に行われていたのだろうか。個々の図書館に着目して図書館活動を分析した研究は、管見の限りでは多くを見出すことはできなかった⁽⁷⁾。

このような先行研究の傾向を踏まえ、本稿では、①内務省がまとめた地方改良運動の優等事例集から図書館を取り上げ、どのような図書館が「優等」とみなされたのか、②優等事例集に採録された図書館から一館を抽出し、その設立目的と活動を分析し、内務官僚たちが掲げた目的が、図書館の現場で実現されていたのか検討を行いたい。

2. 地方改良運動で「優等」とされた通俗図書館

地方改良運動は日露戦争終結後に開始されたが、明治40年代にはその成果をまとめた報告書が何種も内務省地方局から出版されている。その中から図書館が取り上げられているのはさほど多くはなく、『地方改良小観』、『地方経営小鑑』、『地方改良実例』の3冊である。

本章ではこれらで取り上げられた図書館の事例を分析する。内務省地方局から刊行された報告書で取り上げられた図書館の事例は、「優等」と内務省により認定されたものと解することができる。どのようなものが内務省の意向に沿った図書館であるのか、その傾向をつかみたい⁽⁸⁾。

『地方改良小観』明治42年7月

1909年(明治42)7月に内務省地方局から出版された『地方改良小観』を最初に取り上げる。

内務省は同年7月に第1回地方改良事業講習会を開催した。これは日本全国各地や欧米の地方改良事業の優れた事例を紹介して、各府県の担当者に周知せしめることが目的であった。講演が主であったが、さらに会場には「地方に於ける各種経営の事績并製作品を始め、泰西に於ける地方経営に関する写真及内外歴史上の事績を蒐めて之を陳列し、以て参考の資に供せん⁽⁹⁾」という目的で、2500点余りの日本全国各地ならびに欧米の地方改良事例を紹介する「参考品陳列場」が設けられていた。

講習会が終了したあと参考品陳列場も閉鎖されたが、「陳列品并各種事績の説明書を蒐集して之を印刷に附し、(中略)以て其施設経営の参考に資せん⁽¹⁰⁾」という目的で本書がまとめられた。

この中で図書館の事例は5例であり、表1がその一覧である。

表1 『地方改良小観』に採録された図書館の事例

事例の標題	内容
篤志者と江北図書館の設置	滋賀県伊香郡木之本村(現・木之本町)に地元出身の篤志家が図書館を設置。
新潟積善組合と巡回文庫	新潟積善組合専務理事が巡回文庫(今日の移動図書館)用の書籍箱と書籍を寄附
私立有馬会と図書館	兵庫県有馬郡の有馬会という団体が有馬郡からの補助と九鬼子爵その他の補助により650余円で図書館を設立した。1904年(明治37)開設以来、郡民の読書に大いに貢献をしている。
里内文庫と其附帯事業	滋賀県栗太郡葉山村(現・栗太市)の篤志家が図書館を設立。一般向けの図書だけではなく児童向けの図書、新聞、雑誌も収集。さらに標本模型、物産、戦時記念品、講義録、女子向けの図書、植物園も併設していた。巡回文庫も運営。
豪農の篤志と図書館の設立	鳥根県八束郡宍道村(現・松江市)の篤志家が図書館を設置。

いずれの事例も都市部ではなく、村落部で民衆向けの通俗図書館を設立したというものである。これらの図書館の設立母体は、江北図書館、里内文庫、宍道村の図書館は篤志家であり、新潟積善組合と私立有馬会は内務省と関係が深い半官半民の中央報徳会に関連す

る民間団体である。ここで紹介されている5例全てが、府県・市町村の援助に頼ることなく寄付などによって費用を工面して図書館を設立している。特に江北図書館、里内文庫、宍道村の図書館は篤志家が私財を投げ打って図書館を設立しており、「美談」として紹介されている。これらの図書館の中では特に新潟積善組合の巡回文庫が有名で、個別研究も発表されている⁽¹¹⁾。

5例すべてに共通している点の一部の専門家ではなく民衆向けに開設されていること、その目的は身近で実用的な図書を収集して村民に提供し、読書趣味を定着させることであつた。それまでの図書館は貴重な典籍を収集して後世に残すことが主目的で、常に一部の権力者や知識人などが利用することを想定していた⁽¹²⁾。それを180度転換させる図書館ばかり『地方改良小観』では紹介されている。

『地方経営小鑑』明治43年10月

次に『地方経営小鑑』を取り上げる。本書は第1回地方改良事業講習会で展示された「参考品陳列場」と、感化救済事業講習会での「参考展覧品」の事例の中から選択して紹介したものである。そのため、一部『地方改良小観』と重複する事例も確認できる。

本書は全405頁で、300の事例が取り上げられている。うち図書館に関する事例は11であり、表2がその一覧である。

78、109、174、180が既に『地方改良小観』で取り上げられた事例である。「私立有馬会と図書館」のみが本書では再録されなかった。その理由は不詳である。

265の五明文庫は、小学校校長の柏木直平が妻と自身の母親の手も借りて家族ぐるみで通俗図書館を設置し運営していた事例である。当初は柏木が校長を務める尋常小学校内の一室に開設されたが、徳島市の天野亀吉から無償で土地を借りることができたので再開館した経緯がある。1階が婦人閲覧室と児童閲覧室、2階が通常閲覧室で、正五角形の特徴的な建物で、徳島市民に非常に親しまれたという⁽¹³⁾。

柏木はどのような思いで五明文庫を設立したのであろうか。『地方経営小鑑』には次のように記されている(傍線引用者)⁽¹⁴⁾。

直平の師範学校を卒へて、同校に赴任するや教育の普及を図るは、先づ村民の向学心を喚起するに在りと為し、即ち図書室を校内に設け、自己の所有に係かる書籍雑誌新聞等を備へて、青年子弟の縦覧に供せり。

柏木は小学校校長であつたが、児童の教育水準を高めるには、先ず村人の意識改革を行わないと教育に理解を示さないと考え、図書館設立を思い立ったというのである。

次に図書館設立の経緯と資料収集についても記されている⁽¹⁵⁾。

表2 『地方経営小鑑』に掲載された図書館の事例

事例番号	事例の標題	内容
78	篤志者と江北図書館の設置	滋賀県伊香郡木之本村（現・木之本町）に地元出身の篤志家が図書館を設置。
109	新潟積善組合と巡回文庫	新潟積善組合専務理事が巡回文庫（今日の移動図書館）用の書籍箱と書籍を寄附。
174	豪農の篤志と図書館の設立	島根県八束郡宍道村（現・松江市）の篤志家が図書館を設置。
180	里内文庫と其附帯事業	滋賀県栗太郡葉山村（現・栗太市）の篤志家が図書館を設立。一般向けの図書だけではなく児童向けの図書、新聞、雑誌も収集。さらに標本模型、物産、戦時記念品、講義録、女子向けの図書、植物園も併設していた。巡回文庫も運営。
192	柏崎図書館と巡回文庫	新潟県柏崎町（現・柏崎市）では日露戦捷記念として図書館を開館させていたが、今回新たに巡回文庫を設けた。
201	尾道市小学校と通俗図書館	広島県尾道市の高等小学校長が市立通俗図書館設立に奔走。
213	青年団体の共同蓄積と倶楽部文庫の新設	長野県西筑摩郡山口村（現・岐阜県中津川市）の青年団が青年会文庫を設立。
243	篤志者の寄附と図書館	青森県弘前市の篤志家が私立弘前図書館を開館。
247	図書館と児童の読むべき書冊の選択	山口県立山口図書館が幼年者のための推薦図書目録を作成。
248	女学生に読ましむべき教科書以外の書籍	京都府立京都第一高等女学校（現・京都府立鴨沂高等学校）が女学生向けの推薦図書目録を作成。
265	五明文庫長柏木直平の白布呂敷と桐箱の銘	徳島県阿波郡林村（現・阿波市）の尋常小学校校長が尋常小学校内に図書館を設立。校務の余暇を使って珍書・博物資料を蒐集。後に徳島市に移転。

有志の輩之を賛して、図書金品の寄贈を為すもの亦漸く多きを加へ、図書室も為めに狭隘を告ぐるに至りしかば、更に民家を借りて之に移し、茲に^(ママ)始めて五明文庫と命名したり。爾来専ら之れが拡張に努め、校務の余暇地方の特志を訪問して賛助を求め、夏期冬期の休業に際しては、遠く北海道及樺太を始め、満韓地方にも赴きて、只管珍書又は博物資料の蒐集等に勉め、其の蔵書費に二万七千余巻の多きを算ふるに至れり。柏木は本職の小学校校長の傍ら日夜図書館の拡張に努め、資料収集も遠く北海道、樺太（現・ロシア共和国サハリン州）、満洲（現・中華人民共和国東北方）、朝鮮にまで及んだという。資料の増加に伴い五明文庫は林村から徳島市に移転する（傍線引用者）⁽¹⁶⁾。

茲に於てか地を徳島市大瀧山公園の隣地たる桃山の中腹に卜し、工費五千余円を投じて、今や殆んど其の工を竣ゆるに至れり。新築の文庫は、五明文庫の名称に象りて、五角形の建物と為し、其の閲覧室を始め、事務室、製本室、休憩室より樺太室、台湾室等に至るまで、設備殆ど至らざるなく、其の装飾や亦何れも趣味と訓育とを以て充たされざるはあらず。

五明文庫内の様子は、『読書之友』に投稿した鐵火鞭生なる人物によって館内の設備について少し詳しく書かれているが、樺太室、台湾室など当時の日本の植民地の資料専用の部屋があったことがわかる。徳島市民に新しく日本の「版図」になった樺太や台湾を周知せしめる効果を期待してのことであろう。

また新しい五明文庫の建築資材は次のような方法で工面したと、『地方経営小鑑』は記している⁽¹⁷⁾。

而かも其の建築及装飾に要せし費は、何れも地方篤志者の寄贈に成れるものにして即ち用材は材木商、金属品は金物商、瓦は瓦匠の寄附に係る、繩は林村々民に於て、毎戸一把づゝ寄贈し、人夫は青年者及篤志家より之を提供し、大工職工の如きも亦若干の労役を寄附し以て其工を帮けたりといふ。文庫の建設や、斯くの如くして既に一般地方人士の公共心に負ふ所少からず、之に加ふるに其の日用の備品たる筆筒卓子椅子火鉢を始め、消毒薬品諸用紙等の消耗品其の他広告印刷物の如き、亦一として篤志者の力に埃たざるなし。

五明文庫の建設や内装などはみなボランティアで市民が提供してくれたようで、資金はほとんどかかっていなかったと書かれている。地方自治体の援助も受けていないようだ。すべて民間からの無償提供で新図書館開館に漕ぎつけたのである。

そればかりではなく、開館後も徳島の人びとは五明文庫に援助を惜しまなかったようだ。このような記述もある⁽¹⁸⁾。

更に文庫長の活動を助くる為め医師の無料を以て治療を為せるあり、徳島鉄道株式会社は無賃乗車券を交付せるあり、各商店の文庫長の為め其の所用の帽子洋服靴等を寄贈せるあり、飲食店は無代にして副食物を供給し、徳島駅構内の車夫は相約して無賃乗車せしむるが如き、其の他文庫長が各地に出張するに際しては、篤志家相図りて其の旅費を弁ずるが如き、一般の同情此の如く至殷なるを致せるもの、畢竟直平が多年論はらず其の心身を捧げて、文庫の為に尽せるの至誠、遂に衆を動かせしに由らずんばあらず。

驚くべきことに、柏木の診療費や出張旅費、市内移動のための人力車の運賃、衣服代や食事まで市民が無償で提供してくれたというのである。

さてこのように五明文庫は徳島市民の無償の提供によって支えられていたが、大正3年度の閲覧者は4160名、1日平均約12名と当時の小規模館としてはなかなかの入館者数であった⁽¹⁹⁾。しかし文庫長の柏木が1923年(大正12)10月28日に55歳で逝去すると、文庫は閉鎖状態になってしまった。正五角形の特徴的な建物は1945年(昭和20)7月4日早暁の徳島空襲によって灰燼に帰してしまった⁽²⁰⁾。

個人の努力で図書館を設立し、それに徳島の人びとが応えて援助を惜しまないという構図が、内務省官吏の目に留まり『地方経営小鑑』に採録されたのであろう。五明文庫のような事例を内務省地方局が求めていたのである。

さて、この11例の中で他といささか趣が異なるのが、247と248でないだろうか。篤志家や小学校教員が関与していないケースである。ただ両者に共通しているのは、選書に関係しており、どちらも推薦図書目録を編さんしていることである。

当時は児童や男女学生の風紀が社会問題化しており、親や教師は「悪書」の追放を家庭、書店、図書館などに求めていた⁽²¹⁾。事例248の京都府立京都第一高等女学校(現・京都府立鴨沂高等学校)が作成した推薦図書目録を検討すれば、地方改良運動が学生にどのような書籍を「推奨」していたのか知ることが出来る。

事例248で、女学生に推奨する図書が「教訓」・「文章」・「詩歌」・「稗史小説」・「歴史」・「伝記」・「雑」・「雑誌」の八種に分類されて提示されている。このうち「稗史小説」には次の書名が確認できる⁽²²⁾。

- 一、少年文学(本朝偉人伝記) 博文館編
- 一、小公子 巖本嘉志子訳
- 一、リッツル、ロード、フランツルロイ。 バーネット著
- 一、経国美談 矢野文雄著
- 一、次郎島 渡邊霞亭著
- 一、若竹 ^(ママ) 母野フサ訳

では1冊ずつ簡単にどのような書籍であるのか、説明を加えたい。「少年文学」は、博文館から出版されていた伝記小説のシリーズで、1891年(明治24)から1896年(明治29)にかけ全32篇が刊行された。

バーネットの『小公子』は、日本語訳と原書が挙げられている。邦訳は1897年(明治30)に、若松賤子訳で単行本が博文館から出版された。「巖本嘉志子」とは若松賤子の本名である。世界的に有名な児童文学であるが、明治期の女学生にもよく読まれた作品である。原書も提示されているのは、英語学習に最適だと思われていたためであろうか。

『次郎島』は渡邊霞亭が著した家庭小説で、1905年(明治38)に隆文館から出版された。

霞亭は1864年（元治元）に尾張藩士の子に生まれ、1926年（大正15）に逝去した。明治後期から大正にかけて人気があった作家である。

『若竹』はアメリカで著された家庭小説で、丹野フサ（丹野房子とも）が翻訳し、1907年（明治37）に自費出版で刊行された。山路愛山の序文がある。『地方経営小鑑』には「母野」とあるが誤植である。

当時は尾崎紅葉『金色夜叉』が人気を博していたが、恋愛を扱った小説は図書館から忌避されており⁽²³⁾、1冊も挙げていないのが特徴的である⁽²⁴⁾。

さてこの11例の図書館であるが、篤志家や小学校教員有志が設立したものが最も多く、次いで青年団や新潟積善組合などが巡回文庫を設立した事例が続いている。『地方改良小観』とはほぼ同じ傾向の事例が選択されて取り上げられている。いずれも都市部ではなく町村の事例であり、設立された図書館も小規模なものであった。

ここでは五明文庫を少し詳しく取り上げたが、その目的が村民の向学心を上げるためとあり、まさに地方改良運動の目的に沿ったものといえる。さらに京都第一高等女学校の推薦図書を見ると、風紀を乱すと考えられていた小説類はわずか6冊しか挙げておらず、それも『小公子』などの海外の作品や「少年文学」シリーズなどの伝記が占めていた。当時流行していた小説は忌避されていたのである。読書による不良少年の改心をアメリカの事例を参考にしながら、地方改良運動でわが国でも推し進めようとしていたと、かつて筆者は拙稿で指摘したが⁽²⁵⁾、京都第一高等女学校の推薦図書にもその傾向が窺われる。

『地方改良実例』明治45年

最後に1912年（明治45）3月に内務省地方局から出版された、『地方改良実例』を取り挙げる。本書の刊行目的は序文に端的に示されている（傍線引用者）⁽²⁶⁾。

地方改良の事、其の途固より多端なり。而して各府県下の自治体に於て、多年之を實行し、既に成績の顯著なるもの、亦甚だ少からず。

（中略）

思ふに我邦の地方自治は、遠く上代に淵源して、由来最も久しきに拘らず、時勢順応の要務に於て、尚甚だ幼稚なるものあり、外泰西の先蹤に鑑みると共に、内各自実験研究を積み、互に切磋琢磨して、共同の進歩を図らざるへからず、現今尚低位に在る自治体の当局者及び人民か、最も發憤勉勵すへきは勿論、既に多少の工夫を積みて、佳例好範を示し得たる者は、更に一層努力して益々其の美を濟すを期せざるへからず而して本書か是等研究途上の一標識たるへきことは、信して疑はざる所なり。

地方改良運動で「成績顯著なるもの」をまとめ、海外の事例も合わせて一書にし、それ

を参考にして「各自実験研究を積み、互に切磋琢磨して、共同の進歩を図」ることが本書刊行の意図であった。

内容は「事務整理」、「基本財産造成」、「監督指導」、「教化事業」、「産業奨励」、「公衆衛生」、「小作人保護」、「副業の普及」、「公益団体」、「穀物販売組合事例」、「篤志家」、「神社と地方経営」、「条例及諸規約等」の13項目に分けており、良い成績を挙げた事例を顕彰している。この中で図書館を採りあげている項目は「教化事業」と「篤志家」である。前者は27例紹介しているが、そのうち図書館の事例はわずか2例である。

表3 『地方改良実例』「教化事業」に採録された図書館の事例

事例の標題	内容
耶蘇教育会の設置せる簡易図書館	滋賀県愛知郡教育会が設置した簡易図書館について紹介。気軽に入場でき、貸し出しサービスを行っており、そして館内には一人の監視者を置かず「入場者に対する公德心の涵養を図るのが目的」(p.29)であるという。
小学教員の設置せる簡易図書館	埼玉県比企郡八和田村(現・比企郡小川町)の高等小学校訓導が村に図書館がないことを嘆き、自宅近くに簡易図書館を設置した。

傍線を付した埼玉県比企郡八和田村(現、比企郡小川町)の私設千野図書館については後述するので、ここでは滋賀県愛知郡教育会が設置した簡易図書館の事例を紹介する。

簡易図書館を設置するにあたって愛知郡教育会が注意を払ったこととして、5点を挙げている⁽²⁷⁾。

- 第一 気軽に入場し得ること
- 第二 手軽に希望の書を得ること
- 第三 経済的に有益の図書を集め得ること
- 第四 館外読者に対し簡単に図書を貸与し得ること
- 第五 管理、維持の方法を簡便にすること

図書館には土足で館内に入場することができ、子どもであっても容易に書架から蔵書を取り出せるような工夫を凝らした設計となっていた。当時としては珍しい「開架方式」を採用していたのである。さらに「監視人」などは常時いなかったようで無人の時間が多かったようだ。無人であっても蔵書の盗難がないので、「是れ即ち近世の理想を実現せるものにして一面入場者に対する公德心の涵養を図るの方法⁽²⁸⁾」であると、『地方改良実例』では評価している。

さらに次のようなエピソードも紹介している⁽²⁹⁾。

大風呂敷を背負ひつゝ、熱心に農業書を展覧中の青年ありしか館員の来るを見て一揖し遜辞を以て「葡萄提要」なる書籍の購入を懇情したり館員其の故を問ふに該青年は米作の傍ら副業として果樹蔬菜を培養するの傍葡萄の栽培を為さんと計画せるも地方には之に関する実験家も無く独り苦慮せるのみ今本館に於て「実業の日本」広告欄を見るに「葡萄提要」なる、新刊書あり故に其の備付を切望すといへり之に於て館員は青年の熱誠に感して直ちに之を快諾し以て青年の渴望を充たしたるに青年は其の施業上に望外の裨益を得たりといふ

今日の観点からみると、図書館員が図書の請求理由を利用者に尋ねることはプライバシーの侵害に相当する。ただそのような考え方が当時は存在しなかった点はその点は留意しなければならない。この事例から読み取れることは、内務省は図書館が利用されることを求めており、これを「好事例」として他の自治体の図書館も見習うべきだとして『地方改良実例』に採録したことである。不明な点は図書館に通って課題を自分で解決できる、知性あふれる日本人が素晴らしいと内務省は認識していたのであろう。

次に「篤志家」89例のうち、図書館に関係する9例を取り上げる。表4がその内訳である。

いずれも篤志家や地元有志が図書館建設のために尽力した事例である。設立された図書館も簡易図書館から通常のものまで様々であるが、何れも地元民の利用を前提としたものである。「中学生の抱負と図書館の設立」には次のような記述が見受けられる（傍線引用者）⁽³⁰⁾。

（入善町は一引用者注）青年子弟に対する修養及び娯楽の機関絶無にして為めに風紀動もすれば紊れんとするの傾向あり。此の時に当り若し之を放任して顧みさらんか其の影響實に寒心に堪へざるものあるべきを感知し茲に愈々自費を抛ちて一図書館を設立し町民に対して修養上の教材を与へ一面高尚なる趣味を涵養せしめ以て年来の宿望を果たさんことを計画したり

当時の入善町には図書館がなく、若者の風紀も乱れがちであり、さらに成人学習にも不便であった。これらの点から米沢元建は町長に当選した暁に図書館建設を思い立つ。

さて開館した図書館は、かなり町民の「利用」に考慮したつくりになっていた（傍線引用者）⁽³¹⁾。

開館時間は農村の閑暇を利用せん為め午後二時乃至九時半とし元建（引用者註一図書館の設立者・米沢元建）の提供に係る一万冊の図書と雑誌新聞とを備へて随意閲覧せしむ而して閲覧室は和洋の両室に分ち階上には玉突台、風琴、蓄音器等を備へ以て

表4 『地方改良実例』「篤志家」に採録された図書館の事例

事例の標題	内容
医学博士と図書館の拡張	徳島県徳島市の医学博士が私立徳島県教育会附属図書館に多額の寄附を行った。
初老の祝に図書館を立つ	愛知県幡豆郡西尾町（現・西尾市）の豪商が図書館を建設。周囲に果樹園も設けその収益を館の維持費にまわした。
中学生の抱負と図書館の設立	富山県下新川郡入善町の中学生（米沢元建）が、地元で図書館建設の希望を抱き、後年町長に当選したので、はれて図書館を建設した。
終生を図書館事業に委ぬ	青森県青森市の一有志が図書館設立のために長年尽力し、近年青森市に移管された。
老人の奉公心と図書館の設立	石川県鳳至郡剣地村（現・輪島市）の篤志家が私財を投じて図書館を設立。
衆議院議員の寄附に成れる巡回文庫	広島県深安郡野上村（現・福山市）出身の衆議院議員井上角五郎が私財を投じて巡回文庫を設置した。
時計商の寄附に成れる文庫	千葉県夷隅郡大多喜町出身の時計商が多額の寄附を大多喜町にして図書館が設立。
豪農の寄附に成れる図書館	山梨県中巨摩郡田之岡村（現・南アルプス市）の豪農が八田尋常高等小学校内に図書館を設立した。
有志の設立に係る図書館	福岡県福岡市の有志が図書館を設立。農業参考館も併設して農家の参考に供した。更に博物館も併設した。

読書の傍ら娯楽を為すに便する等設備は総て公衆本位となせり。（中略）町民は自から読書趣味を覚え且つ高尚なる娯楽趣味を知るに至り民風上に及ぼしたるの効果計からさるものありといふ。

さらに図書館にはビリヤードやオルガン、蓄音器までもが備えられていた。これらは「読書趣味を覚え且つ高尚なる娯楽趣味を知る」役割を期待されて図書館に置かれたのである。

『地方改良実例』で取り上げられた図書館は、いずれも「利用」を重視した図書館であり、地域住民の教育、そして若者の「風紀改善」にその効果を発揮することが期待されていた。そして図書館の設立者は地域の篤志家や小学校教員などの有志であり、彼らが自発的に設立した図書館を「成績の顕著なるもの」として顕彰したのである。注目すべき点は、これらの図書館は住民に強制的に図書館を利用させようとの思惑は全くないことである。例えば富山の入善町図書館のようにビリヤードやオルガンなどを配置して、読書に馴染みが薄い町民（当時は多かったと思われる）も図書館になんとか足を向けてもらおうとの努力が垣間見られる。

次章では一つの事例に絞って、図書館の設立目的と実際の活動を明らかにしたい。『地方改良実例』「教化事業」に採用された埼玉県比企郡八和田村の私設千野図書館（以下、千野図書館と略記する）に着目する。

3. 埼玉県比企郡八和田村私設千野図書館の事例

千野図書館は『地方改良実例』でも言及されているように、八和田尋常高等小学校訓導の千野幸三郎によって設立された、埼玉県内初となる私立図書館である。特に青年を利用者として想定し活発に事業を展開していた。千野図書館は埼玉県教育史や小川町郷土史の文脈で僅かに言及されることはあったが⁽³²⁾、本格的に検討されたことは管見の限りではない。

本章では千野図書館の設立意図、蔵書の分析、活動の3点を明らかにし、地方改良運動で顕彰された図書館の実態を明らかにする。

設立者千野幸三郎の経歴

千野図書館の設立者、千野幸三郎の経歴についてまずまとめてみたい。千野は学歴がなかったが小学校准訓導から出発し小学校長、埼玉県視学まで登りつめ、戦後は八和田村長、小川町教育委員を務めた埼玉県教育界の白眉である⁽³³⁾。

千野は1881年（明治14）に、埼玉県比企郡高谷村（現・比企郡小川町）の農業千野善兵衛の長男として生まれた。当時高谷村には学校がなかったため、隣村の比企郡上横田村（現・比企郡小川町）の文明学校に入学した。小学校時代の千野は読書と勉強に励んだが、父の善兵衛は「農家に学問は必要ない」として千野の勉学好きを疎んじていたという。しかし千野は父の目を盗んで読書に勤しみ文明学校を卒業後は、小川町と4ヶ村（大河村・竹沢村・八和田村・七里村）立の高等小学校に進学した。ちなみに千野が文明学校在学中に高谷村は8ヶ村と合併し、新しく八和田村が誕生していたのである。

さて、高等小学校を卒業した千野はさらに上級学校への進学を希望していたようだが、父・善兵衛は許さず、家業の農業に従事することになった。しかし農作業の傍ら黙々と勉強を続け、独学で小学校の准訓導の免許も取得した。父もとうとう折れて千野が教職に就くことを許してくれた。

1899年（明治32）6月に千野は、恩師であり校長の職にあった小島重太郎の推挙によって、母校である文明尋常高等小学校（現・小川町立八和田小学校）に奉職した。2年後には訓導の免許も取得した。1909年（明治42）に文明尋常高等小学校は八和田尋常高等

小学校と改称した⁽³⁴⁾。

千野は着任以来1919年(大正8)まで、20年にわたって母校で教鞭を執った。その勤務態度は誠実勤勉で、自己研修も怠らなかったという。1913年(大正2)に『埼玉県教育会雑誌』に寄稿した文章で、千野は教育者にとって大事なことは「一、吾人は強き職業的精神を有すべし(中略)一、吾人は職業的修養を怠るべからず。(中略)一、吾人は学校内外の師表たることを自覚すべし(中略)一、吾人は職に楽まん事を期すべし」の4点であると述べている⁽³⁵⁾。

千野は中等教員予備試験に2度ほど合格しており、各地の中学校から招聘の話が来たがそれらは皆断り、母校で故郷の子どもたちの初等教育に意を注いだのである。

日露戦争後、内務省は地方改良運動を推進し、八和田村にも運動を推進することが国や埼玉県から求められた。千野は小学校訓導ではあったが、村民の通俗教育(社会教育)にも心を砕き青年団の結成や夜学会を開校したりしていたが、十分な成果が得られなかった。そこで、1910年(明治43)1月20日に自宅の一部を開放して私立図書館を開設することにした。村民の教育に対する関心を引き出すためには、書物に親しまなければならないという考えからであった。この図書館が千野図書館である⁽³⁶⁾。

小学校教師として千野は、特に綴り方教育に力を入れた。大正新教育の先駆者であった芦田恵之介の影響を大きく受け、「随意選題」での綴り方を児童に課していた⁽³⁷⁾。千野の綴り方教育は高い評価を得ていた。

1919年(大正8)には、それまでの実績が認められて比企郡七里村(現・比企郡嵐山町)の七郷尋常高等小学校(現・嵐山町立七郷小学校)の校長として栄転した。さらに小学校付設の七郷農業補習学校長も兼務した。小学生だけではなく、青年教育にも携わったのである⁽³⁸⁾。また1924年(大正13)には、小学校内に七郷村立図書館を開設している。やはり図書館に関心があったのだろう。

1925年(大正14)12月に千野は県視学に抜擢される。人事権を含む大きな権限が与えられた教員の監督官であり、師範学校を出ていない叩き上げの千野のような者が指名されることは極めて異例のことであった。1929年(昭和4)1月、千野は北葛飾郡幸手町(現・幸手市)の幸手尋常高等小学校(現・幸手市立幸手小学校)の校長に就任し、泰任官待遇を受ける。千野は幸手尋常高等小学校でも綴り方教育を学校経営の中核に据えている⁽³⁹⁾。

1933年(昭和8)4月、熊谷市の熊谷市立熊谷男子尋常高等小学校(現・熊谷市立熊谷東小学校)の校長に栄転した。同校は当時、県北部の中核校で男子校であった。1935年(昭和10)4月に男女共学となり、熊谷市立熊谷東尋常高等小学校と改称した。共学化、そして新校舎建設が千野の東小校長時代の最大の仕事であった。1936年(昭和11)3月に

千野は校長を退任し、郷里の八和田村に帰った。50歳であった。

帰村後、千野は県経済更生委員、県報徳会理事、保護司などを歴任した。戦後の1949年(昭和24)7月に八和田村長に当選し、新制の八和田村立八和田中学校(現・小川町立東中学校)、八和田公民館建設などに尽力した。1955年(昭和30)2月、八和田村が小川町と合併したので退任した。その後も、1957年(昭和32)から1961年(昭和36)まで小川町教育委員を務めた。1976年(昭和51)2月9日に94歳で逝去した。校務の傍ら、吉見百穴に自生するヒカリゴケの研究と、江戸中期の国学者橋守部の研究を行っていた⁽⁴⁰⁾。

千野は教育に一生を捧げたわけであるが、小学校奉職時には通俗教育(社会教育)にも関心を寄せ、千野図書館と七郷村立図書館を設立している。これは地方改良運動の影響だけではなく、図書館を設立して広く村民に知性と教養、品格を身につけてもらおうというのは、千野の教育思想であったと思われる。

次項では千野のそういった教育思想とも絡めて、千野図書館設立意図を探っていききたい。

私設千野図書館の設置意図

千野が図書館を設立したのは1910年(明治43)1月であったが、明治末期において個人が図書館を新設することは比較的自由にできた。

図書館令(明治32年11月11日勅令第429号)第5条には「図書館ノ設置廃止ハ其ノ公立ニ係ルモノハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ其ノ私立ニ係ルモノハ文部大臣ニ開申スヘシ」とあり、私立図書館は文部大臣に「開申」することで設置できた。「開申」とは「職権内でしたことを監督官庁に報告すること⁽⁴¹⁾」とあり、あくまで「報告」であって審査は基本的になかった。

千野は1909年(明治42)12月18日付で、文部大臣小松原英太郎宛に「開申書」を提出している(傍線引用者)⁽⁴²⁾。

開申書

私儀今般教育勅語戊申詔書ノ御趣旨ヲ奉戴シ地方青年ノ学力品性ヲ培養シ優良ナル青年風紀ノ振作ヲナサンタメ私設図書館設置候ニ付左記方法ヲ具シ此段及開申候也

明治四十二年十二月十八日

埼玉県比企郡八和田村大字高谷六拾六番地

千野幸三郎

文部大臣小松原英太郎殿

千野は、1890年(明治23)10月30日付に明治天皇名で発せられた「教育ニ関スル勅語」、1908年(明治41)10月13日付で発せられた「戊申詔書」の背景のもとに私立図書館を

設置すると記している。特に戊申詔書は、従来から地方改良運動が開始されるきっかけになったものと指摘されている⁽⁴³⁾。事実、詔書には「忠実業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ⁽⁴⁴⁾」との文言があり、地方改良運動の目的とも合致している。戊申詔書と地方改良運動には深い結びつきがあることは疑いないであろう。

さて、図書館設立目的には八和田村の青年を主な利用者として想定し、学力を向上させ、風紀を改善することを挙げている。戊申詔書の精神と一致していることが確認できる。

以上の点から、千野図書館は戊申詔書を背景として設置されており、地方改良運動の目的とも自然と合致していたことが指摘できる。

私設千野図書館開館時の概況

次に開設当初の千野図書館の概況について「開申書」に基づいてみていきたい。まず名称と所在地であるが、次のように記されている⁽⁴⁵⁾。

一、名称 私設千野図書館トス

一、位置 埼玉県比企郡八和田村大字高谷六拾六番地

図書館の正式名称は「私設千野図書館」であり、所在地は千野の自宅に図書館部分を増築して設置された⁽⁴⁶⁾。設備は図書置場、閲覧室、娯楽室、掛物置場、便所で、敷地坪数は25坪、建物坪数は12坪であった⁽⁴⁷⁾。図書館は廊下で千野邸と直結していた。なお、開設に際しての各種費用（閲覧所設置費600円、第1期図書購入費182円40銭、薪炭石油費年額15円、その他雑費）すべてが千野の自己負担であった⁽⁴⁸⁾。

開館にあたって千野は「館則」を定めている⁽⁴⁹⁾。

第一条 本館ハ設置者ヲ以テ館主トス

第二条 本館ノ図書ヲ借覧セントスルモノハ図書名ヲ記シ館主ニ申出ズベシ

第三条 本館ノ図書ハ都合ニヨリ館外ニ貸出スルコトアルベシ

第四条 本館ノ図書ヲ館外ニ貸出サントスルモノハ其ノ日数ヲ期シ申出ズベシ

第五条 本館ハ図書閲覧料ヲ徴集セズ

第六条 本館ノ図書ヲ汚損又ハ紛失セルモノハ弁償セシムルコトアルベシ

附記

一、農閑ノ時期ヲ利用シ青年夜学会ヲ開催スルコトアルベシ

二、祭日休日ヲ利用シ小学校職員実業家経験家其ノ他名士ヲ聘シ講話会ヲ開催スルコトアルベシ

この館則からは、①館外貸出を行っている、②無料で利用できる、③図書貸出だけではなく青年夜学会や様々な分野の専門家を招いての講話会など各種行事も行っている、の3点

が読み取れる。現代の公共図書館の活動にも通じるものばかりであるが、千野図書館は単なる図書貸出の施設ではなく、勉学を核にした村民（特に青年）のコミュニティを形成しようとしていたことが窺える。そういった活動を通して「地方青年ノ学力品性ヲ培養シ優良ナル青年風紀ノ振作」をなさしめようとしたのである。

このようなことを目標に開館した千野図書館であるが、利用実態はどうであったのだろうか。

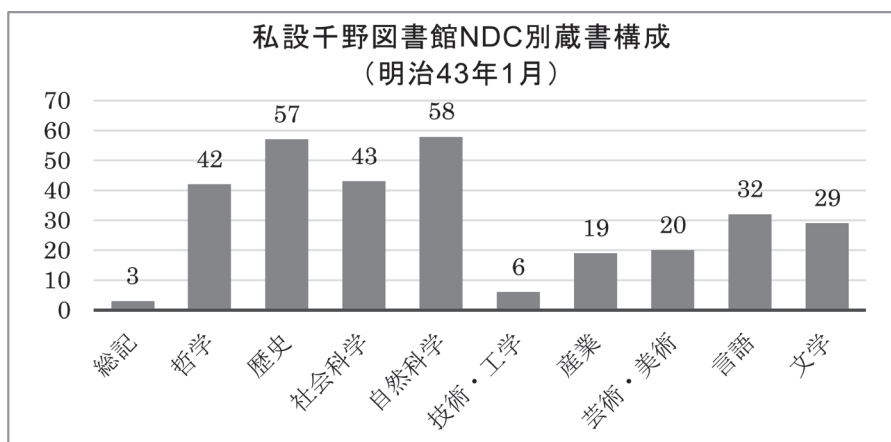
私設千野図書館の蔵書数・利用実態

千野図書館の蔵書傾向と総数に関して窺える史料は、今日さほど残されていない。「蔵書目録」として残されているのは2種であり、それも開館当初の時期に集中している。ただ総蔵書数については埼玉県に報告され『埼玉県統計書』に掲載されていた。しかし大正11年度を最後に図書館ごとの蔵書数は掲載されなくなったので、それ以降の蔵書数は不明である。

1910年（明治43）1月開館時の蔵書を、『日本十進分類法新訂10版』（NDC）の一次区分で分類して棒グラフに表したのが表5である。冊数ではなく書籍の種類の数である。小川町教育委員会に所蔵されているマイクロフィルム『蔵書目録 明治四十三年一月 私立千野図書館』（千野家文書）を元に作成した。

最も多いのが「自然科学」で58種、次いで「歴史」57種となっている。さらに「社会科学」43種、「哲学」42種と続いている。現代の公共図書館で最も多いのが「文学」であるが、千野図書館では6番目で29種となっている。

表5 私設千野図書館 NDC 別蔵書構成 (明治43年1月現在) ※数字は冊数ではなく書籍の種類数



「文学」の内訳は表6で示す。

表6 私設千野図書館所蔵「文学」書(明治43年1月現在)

書籍名	冊数	著者名
前後 古文真宝	4	
文章軌範	6	
文章軌範講義	6	岡三慶
唐詩選	4	小林新兵衛
唐詩選講義	4	小林新兵衛
唐宋八大家文	12	
唐宋八大家文講義	20	
古今詩文詳解	1	興文社
近世叢語抄	1	興文社
写本 平家物語	12	
竹取物語	1	佐佐木信綱
更級日記	1	佐佐木信綱
伊勢物語	1	佐佐木信綱
土佐日記	1	佐佐木信綱
青年補習読本	1	埼玉県教育会
さへづり草	1	一致書店
皐月会歌集	1	関貢米
類題和歌怜野集	2	清原雄風
短歌小梯	1	森田義良
歌学文庫	1	一致堂書院
桂園一枝	1	香川景樹
俳諧九百題	2	椿海潮堂
舶来すみれ	1	今村良治
不如帰	1	徳富蘆花
後の不如帰	1	
明治四十年の日本	1	末広鉄腸
続実録全集	1	
講談落語	1	松林伯知
箱根権現麓の仇討	1	柴田貢

当時多くの読者を獲得していた尾崎紅葉などの硯友社系の小説や探偵小説、村上浪六や塚原洪柿園などの時代小説、講談速記本など⁽⁵⁰⁾はほとんど所蔵されておらず、ベストセラー小説はわずかに徳富蘆花『不如帰』、松林伯知『講談落語』、柴田實『箱根権現麓の仇討』が所蔵されているのみである。漢籍や日本の古典文学作品は多く所蔵されており、

千野図書館の利用者である農民が愛読するには難しい内容の文学書が多い。

紙幅の都合から全蔵書を本稿で掲載することはできないが、最も多い「自然科学」や「歴史」の中には師範学校で使用している教科書も数多く含まれている。

千野図書館は青年相手に夜学会や、村民を対象とした講話会なども開催していたが、そのため勉学の参考になる書籍が数多く蔵書の中に占められている。娯楽書は極めて数が少なかったのが特徴的である。

次に蔵書数と閲覧人数の変動をみていきたい。

表7 私設千野図書館蔵書冊数・利用者数一覧（『文部省年報』、『埼玉県統計書』を元に作成）

年度	蔵書数（冊）	閲覧人数（人）	開館日数	備考	八和田村立戸田図書館閲覧人数（人）
明治 42	849	217	45	明治 43. 1.30 開館	—
明治 43	1,062	458	316		—
明治 44	1,123	462	305		—
大正元	1,172	368	295		—
大正 2	1,289	1,096	325		156
大正 3	1,347	603	335		871
大正 4	1,349	636	335		904
大正 5	1,439	637	335		951
大正 6	1,495	7,590	330		11,560
大正 7	1,474	7,590	330		8,210
大正 8	1,499	308	330		510
大正 9	1,499	301	330		450
大正 10	1,508	306	330		460
大正 11	1,518	306	330		460

初期は順調に蔵書数を伸ばしているが、大正 5 年度以降は年間 10 冊程度の小幅な増加にとどまっている。開館日数は年間 300 日前後であり、休館日は年間 60 日ほどであった。

閲覧人数は、初期は 400 人から 600 人と順調に増えているものの、1919 年（大正 8）以降は 300 人程度で落ち着いている。閲覧人数減少の理由として 2 点考えられる。

① 1919 年（大正 8）に千野は八和田尋常高等小学校から転出したが、転出後に閲覧人数が減少している。図書館活動は千野個人に負うところが多かったと推察されるので、異動により不活発になったと考えられる。

② 八和田村立戸田図書館（以下、戸田図書館。現・小川町立図書館）が 1914 年（大正

3) 1月14日に開館し、そちらに利用者が移った可能性が考えられる。事実、戸田図書館は大正3年度から利用者は871人と千野図書館の603人を早くも上回り、以降それが常態化した。

ちなみに『小川町の歴史 通史編』には、大正6年度の数値を示して「閲覧人数はトップで二位の熊谷町立図書館の二五五〇人を大きく上回っていた⁽⁵¹⁾」とあるが、この出典は『埼玉県教育史』第4巻に掲載された「図書館一覧表(大正六年度埼玉県統計書による)」の数値を元にしたものである⁽⁵²⁾。

この表は主要な公共図書館のみ抜粋して記録されており、県内すべての図書館の利用状況が分かるものではない。したがってこの表のみで「県内トップ」と記した『小川町の歴史 通史編』の記述は誤りとなる。『埼玉県統計書 第二巻学事之部 大正六年』によれば、閲覧者数1位は戸田図書館で11560名、2位が私立川越図書館(現・川越市立図書館)で10653名、3位が千野図書館である⁽⁵³⁾。それでも上位であることに変わりないが、大正6・7年度が戸田図書館ともども閲覧者数が突出しており、当時八和田村で図書館利用を促進させるなんらかの行事など開催されたと思われるが、詳細は不明である。

千野図書館は当時の私立図書館としては蔵書数、閲覧者数共に健闘したといえるが、千野の個人的な努力により維持していたと思われ、他村の小学校に異動した後はさほど利用されなくなったと思われる。また同村内に公立図書館が新たに開館したことの影響もあり、閲覧者数低下につながったと思われる。

私設千野図書館の活動

では千野図書館はどのような活動を行っていたのであろうか。実は千野図書館の活動実態を詳細に今日に伝えている史料は管見の限りでは発見することができなかった。おそらく現存していないと思われる。本稿では断片的な史料から可能な限り探っていきたい。

開館当初に千野によって定められた館則には農閑期に青年夜学会、休日には著名人を招聘しての講話会を開催すると明記されていた。大正6年度に千野は学事功労者として埼玉県から表彰されるが、比企郡長から埼玉県知事に充てた学事功労者の推薦書に次のように記されている⁽⁵⁴⁾。

青年ハ寸暇ヲモ利用シテ此館ニ就キ閲読スルモノ多シ農閑休業日若クハ冬季ニ於テハ毎夜同館ニ青年ヲ集メ自ラ指導者トナリテ夜学会ヲ開キ補習教育ニ貢献スルコト多年是ヲ以テ同地方青年ノ風紀大ニ革リ一郷醇厚ノ俗ヲナスニ至レリ社会公衆ヲ益スル多大ナリ

これを見ると、農閑期は冬季であったようで、毎日夜学会を開催していたとある。それ

ゆえ蔵書に師範学校の教科書が多かったと思われる。

講話会の方は、1911年（明治44）4月16日に、小川尋常高等小学校（現・小川町立小川小学校）で行われた。午後2時に開会し、「教育と時勢」、「自治経営について」、「産業と民風」などの講演が行われた。聴衆は600名余りで午後6時に閉会した。引き続き午後7時からは相生座において幻灯会が催された。こちらはさらに聴衆が増え800名となっていた。終了したのは午後11時であった⁽⁵⁵⁾。娯楽とセットになったイベントであったのである。

さらに八和田青年団との連携も密接であった。大正11・12年度の「八和田青年団ニ関スル調査要項」には次のようなことが記されている⁽⁵⁶⁾。

一、公立戸田図書館（大正三年一月創設）私立千野図書館（ママ）（明治四十三年一月創設）巡回文庫ノ利用ヲナスコトニ依リ団員ノ修養ニ資スル十余年ニ及ベリ

戸田図書館とともども青年団とは密接に連携がなされていたようである⁽⁵⁷⁾。

八和田村の青年団は、村内の七集落（上横田、下横田、中爪、奈良梨、能増、高見、高谷、伊勢根）にあった青年団を、1917年（大正6）3月17日に統合したものである⁽⁵⁸⁾。そのうち高谷集落の青年団は千野図書館開設以前から、千野が運営に腐心していた組織である⁽⁵⁹⁾。

青年指導ヲ以テ自ラ任シ夙ニ青年団ヲ組織シテ風紀ノ改善ニ補習教育ニ苦辛経営日モ亦足ラザルガ如シ

高谷集落の青年団は千野によって運営されていたので、集落の青年たちはその頃から図書館を頻繁に利用していたのであろう。1917年（大正6）に統合されても、青年団の若者たちは図書館を利用し続けたと思われる⁽⁶⁰⁾。

（イ）図書館巡回文庫ノ設備利用等ノ状況

本村ニハ公立戸田図書館（ママ）私立千野図書館アリテ其ノ間ニ巡回文庫ノ設置ニ依リテ是レガ連鎖ヲナシ図書交換閲読ノ便アリテ青年ハ読書ノ機会ヲ得ルコト大ナリトス本館ハ休日等会合ノ場所ニ利用セラル従ツテ読書趣味養成向上ニ多大ノ裨益アリ

巡回文庫青年団各支部事務所ヲ以テ閲覧所ニ充ツ所要冊数数百冊トス

青年団と両図書館が密接に連携を取っており、また青年団の会合に図書館を使用していたことが分かる。さらに巡回文庫も稼働しており、数百冊の蔵書を有していた。自然と青年に書籍や読書という行為が身近に感じられるようになったことが窺われる。

千野図書館について史料に基づいて明らかにしてきた。教育勸語や戊申詔書の精神を村民に広めるために千野が私財を提供して開設し、読書による風紀改善を目指し、さらに

青年団と密接に連携を図ることにより利用者数を増加させたことが指摘できる。

しかし戸田図書館が設置されてからは、利用者数が落ち込んでしまったことは否めない。八和田村は1955年(昭和30)2月11日に小川町に吸収合併され、戸田図書館も現在の小川町立図書館に併合される形になったが、千野図書館はそこに含まれていなかった。おそらく戦後に至るまでに自然消滅してしまったのではないかと思われる。

4. おわりに

地方改良運動は従来の図書館を180度転換することを内務省は狙っていた。それまでの図書館は江戸時代までの和漢書の古典籍や学術書が大半を占め、地域住民にはまったく縁がなかった。また図書館の機能も閉架主体で館外貸出も認めず、さらに有料であった。内務省はそれらの図書館を否定し、地域住民に利用されるための小規模な通俗図書館を奨励した。さらに設立主体は財政難の自治体ではなく、豪農などの名望家や小学校教員などが中心になって資金や土地建物を出し合い、手作りで図書館を作ることを勧めた。

その図書館では主に青年層を中心にして利用促進が図られ、組織された青年団を通して図書館の活用が行われた。その目的は読書を通して修養を積ませ、人格を練磨することにあった。

さらに本稿では、地方改良運動の「優等」事例に取り上げられている埼玉県比企郡八和田村の千野図書館を取り上げ、設立経緯、蔵書、利用状況、図書館活動を中心に分析を行った。千野図書館は小学校教員である千野幸三郎が私財をなげうって設立したもので、所蔵している文学書は和漢の古典的な作品が多く、当時流行していた小説がほぼ所蔵されておらず、娯楽よりも修養が目的であったことが窺えた。利用状況は当時としては高い利用率を誇っていたが、おそらく青年団員を動員しての読書会などの行事による利用者数だとと思われる。はたして八和田村民が自発的に千野図書館を利用していたかは疑問である。その傍証として千野が八和田尋常高等小学校から異動した後に利用者が減少している。図書館の活動は講演会、幻灯会などを行っていた。これらの目的が、読書によって知識を高め、品位を向上させるものであり、内務官僚が掲げた目標が実行に移されていることが確認された。

千野図書館は「修養」という目的を全面的に出して活動を行っていたといえる。その点、前述した富山の入善町図書館のように町民に親しまれるような配慮はあまり確認できなかった。おそらく千野個人による「人徳」によって利用者を確保していたのであろう。

しかしこの小規模な図書館が、今まで書籍や読書と無縁であった町村の若者や児童に

広めた効果もあったことは否めないであろう。公立の戸田図書館が開館した後は、設備が整ったそちらに利用者が流れてしまったのは仕方がないとしても、図書館から村人の足が遠のいたわけではないのである。

地方改良運動は大正期に入ると停滞していき、通俗図書館も管理する人物がいなくなり多くが自然消滅してしまった。代わって大正期に入ると文部省が図書館に関心を示し、社会教育行政を活発化させるが、それについては稿を改めて検討を深めたい。

謝辞

本研究は、令和2年度～令和5年度日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「近代日本の国民国家形成期における図書館の役割（課題番号JP 20K12561）」の助成を受けたものである。

注

- (1) 通俗図書館とは「明治末期から昭和初め頃まで全国各地に設立された一般民衆啓蒙のための図書館」（日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第5版、丸善、2020. p.158.）のことである。
- (2) 平岡洋一『日露戦争が変えた世界史：「サムライ」日本の一世紀』改訂新版、芙蓉書房出版、2005.
- (3) 有泉貞夫「地方改良運動」国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第9巻、吉川弘文館、1988. p.436.
- (4) 石井敦『日本近代公共図書館史の研究』日本図書館協会、1971. 永末十四男『日本公共図書館の形成』日本図書館協会、1984. 小川剛「明治末期の通俗図書館の発展：地方改良運動との関連で」『みんなの図書館』94号、図書館問題研究会、1985. 3. 奥泉和久「四章 通俗図書館の成立と展開」小川徹・奥泉和久・小黒浩司『公共図書館サービス・運動の歴史：そのルーツから戦後にかけて』1、日本図書館協会、JLA 図書館実践シリーズ4、2006. p.108-113. など。
- (5) 新藤透「明治後期の地方改良運動を推進した内務省官吏の図書館認識：井上友一、水野錬太郎、田子一民を中心に」『國學院雑誌』第122巻第5号、2021. 5. p.52.
- (6) 新藤透『図書館の日本史』勉誠出版、ライブラリーぶっくす、2019. p.275-282.
- (7) 少数ではあるが先行研究として挙げられるものに例えば、奥泉和久『『積善組合文庫』考』『図書館学会年報』第29巻第1号、1983. 3. がある。個別図書館の事例研究ではないが、地方改良運動によって成立された巡回文庫については近年、中山愛理「茨城県における巡回文庫の導入と展開：1907年～1944年」『茨城女子短期大学紀要』38号、2011. 新藤雄介「明治30—40年代における書籍を巡る協同行為と地域組織：図書閲覧所から巡回文庫へ」『マス・コミュニケーション研究』80号、2012. などがある。

- (8) 『地方経営小鑑』、『地方改良実例』の分析は、筆者は新藤透「地方改良運動が図書選択論に与えた影響について：特に井上友一に着目して」(『日欧比較文化研究』第16号, 2012.10.)において若干検討を行ったがきわめて簡潔なものであり、さらに『地方改良小観』は検討対象にしておらず不十分なものであった。本稿で改めて取り上げてより詳細に分析を行いたい。
- (9) 『地方改良小観』内務省地方局, 1909.
- (10) 前掲(9)『地方改良小観』
- (11) 前掲(7)奥泉和久「『積善組合巡回文庫』考」
- (12) 前掲(6)新藤透『図書館の日本史』
- (13) 鐵火鞭生「五角の図書館 四国の名物阿波の奇人」『読書之友』8号, 1912.12.
- (14) 『地方経営小鑑』内務省地方局, 1910. p.358.
- (15) 前掲(14)『地方経営小鑑』p.358.
- (16) 前掲(14)『地方経営小鑑』p.358.
- (17) 前掲(14)『地方経営小鑑』p.358-359.
- (18) 前掲(14)『地方経営小鑑』p.359-360.
- (19) 徳島市史編さん室編『徳島市史』第4巻 教育編・文化編, 徳島市教育委員会, 1993. p.620.
- (20) 前掲(19)徳島市史編さん室編『徳島市史』第4巻 教育編・文化編, p.620.
- (21) 新藤透「明治・大正期に於ける学生風紀問題と「選書」論」『日欧比較文化研究』第18号, 2014.10.
- (22) 前掲(14)『地方経営小鑑』p.332.
- (23) 前掲(21)新藤透「明治・大正期に於ける学生風紀問題と「選書」論」
- (24) 文芸評論家の古谷綱武は1954年(昭和29)に出版した『読書と学生』で「日本の教育が、ときには文学書を、有害の書と考えてきたこと。それほどつよく考えない場合にでも、なるべく近づかない方がよいものと考えていたのは、まだそんなに遠い事ではありません」と指摘している(古谷綱武『読書と学生 中学生の文芸教室鑑賞編』同和春秋社, 1954. p.24.)。
- (25) 前掲(8)新藤透「地方改良運動が図書選択論に与えた影響について：特に井上友一に着目して」、前掲(5)同「明治後期の地方改良運動を推進した内務省官吏の図書館認識：井上友一、水野錬太郎、田子一民を中心に」
- (26) 「地方改良実例」神谷慶治監修『地方改良運動史資料集成』第5巻, 柏書房, 1986. p.3-4.
- (27) 前掲(26)「地方改良実例」p.29. 引用するに際し、項目ごとに改行をした。
- (28) 前掲(26)「地方改良実例」p.29.
- (29) 前掲(26)「地方改良実例」p.30. なお、この事例は前掲(8)新藤透「地方改良運動が図書選択論に与えた影響について：特に井上友一に着目して」でも言及した。
- (30) 前掲(26)「地方改良実例」p.102. なお、この事例は前掲(8)新藤透「地方改良運動が図書選択論に

与えた影響について：特に井上友一に着目して」でも言及した。

- (31) 前掲 (26)「地方改良事例」p.102.
- (32) 埼玉県教育史では、埼玉県教育委員会編『埼玉県教育史』第4巻、埼玉県教育委員会、1971. p.765. があり、小川郷土史では、『八和田村誌』村誌編纂委員会、1955. p.71-72. 八和田小学校開校百年記念誌編纂委員会編『八和田小学校開校百年記念誌』八和田小学校開校百年記念誌編纂委員会、1975. p.69-70. 小川町編『小川町の歴史 通史編』下巻、小川町、2003. p.287. 小川町編『小川町のあゆみ：小川町の歴史普及版』小川町、2005. p.145. 新田文子『小川町の歴史あれこれ：五十話のヒストリー』朝日新聞サービスアンカー ASA 小川町、2015. p.56-57. などの文献で言及されている。なお、千野図書館を主題にした個別論文は発表されていないようである。
- (33) 千野の経歴に関しては、石井昇著・岩上進監修「埼玉の教育人脈 千野幸三郎」①～⑥『全国教育新聞』第461-466号、2001.10.15-2002.1.1. がまとまっており、本稿でも参照した。
- (34) ここまでは、石井昇著・岩上進監修「埼玉の教育人脈 千野幸三郎」①『全国教育新聞』第461号、2001.10.15、2面. に拠った。
- (35) 千野幸三郎「吾人は倍々努力するを要す」『埼玉県教育会雑誌』第65号、1913. 2.
- (36) ここまでは、石井昇著・岩上進監修「埼玉の教育人脈 千野幸三郎」②『全国教育新聞』第462号、2001.11. 1、2面. に拠った。
- (37) 石井昇著・岩上進監修「埼玉の教育人脈 千野幸三郎」③『全国教育新聞』第463号、2001.11.15.2面.
- (38) ここまでは、石井昇著・岩上進監修「埼玉の教育人脈 千野幸三郎」④『全国教育新聞』第464号、2001.12. 1、2面.
- (39) ここまでは、石井昇著・岩上進監修「埼玉の教育人脈 千野幸三郎」⑤『全国教育新聞』第465号、2001.12.15、2面.
- (40) ここまでは、石井昇著・岩上進監修「埼玉の教育人脈 千野幸三郎」⑥『全国教育新聞』第466号、2002. 1. 1、2面.
- (41) 「コトバンク 精選版 日本国語大辞典」
<https://kotobank.jp/word/%E9%96%8B%E7%94%B3-457665> 2021.1.29 閲覧
- (42) 「明 3368, 1, 学務部, 雑款, 比企郡八和田村私立図書館設置開申書進達ノ件」埼玉県立文書館所蔵
- (43) 宮地正人『日露戦後政治史の研究』東京大学出版会、1973.
- (44) 「戊申詔書」『官報』第7592号、印刷局、1908.10.14. p.343.
- (45) 前掲 (42)「明 3368, 1, 学務部, 雑款, 比企郡八和田村私立図書館設置開申書進達ノ件」埼玉県立文書館所蔵
- (46) 他の史料では「私立千野図書館」とも書かれているものもあるが誤りである。
- (47) 前掲 (42)「明 3368, 1, 学務部, 雑款, 比企郡八和田村私立図書館設置開申書進達ノ件」埼玉県立文

書館所蔵

- (48) 前掲(42)「明 3368, 1, 学務部, 雑款, 比企郡八和田村私立図書館設置開申書進達ノ件」埼玉県立文書館所蔵
- (49) 前掲(42)「明 3368, 1, 学務部, 雑款, 比企郡八和田村私立図書館設置開申書進達ノ件」埼玉県立文書館所蔵
- (50) 尾崎秀樹『大衆文学の歴史』上巻戦前篇, 講談社, 1989. 澤村修治『ベストセラー全史【近代篇】』筑摩書房, 筑摩選書, 2019. p.68-93.
- (51) 前掲(32) 小川町編『小川町の歴史 通史編』下巻, p.287.
- (52) 前掲(32) 埼玉県教育委員会編『埼玉県教育史』第4巻, p.764-765.
- (53) 『埼玉県統計書 第二巻学事之部 大正六年』埼玉県庁, 1919. p.86-87.
- (54) 「大 855, 7-57, 学務部, 雑款, 比企郡八和田村私立千野図書館設立者千野幸三郎学事功勞者事績調」埼玉県立文書館所蔵
- (55) 『埼玉新報』明治44年4月19日. 2面.
- (56) 「大 1256, 15-2, 社会部, 社会教育 比企郡八和田村青年団ニ関スル調査要項」埼玉県立文書館所蔵
- (57) 前掲(56)「大 1256, 15-2, 社会部, 社会教育 比企郡八和田村青年団ニ関スル調査要項」埼玉県立文書館所蔵
- (58) 前掲(56)「大 1256, 15-2, 社会部, 社会教育 比企郡八和田村青年団ニ関スル調査要項」埼玉県立文書館所蔵
- (59) 前掲(54)「大 855, 7-57, 学務部, 雑款, 比企郡八和田村私立千野図書館設立者千野幸三郎学事功勞者事績調」埼玉県立文書館所蔵
- (60) 前掲(56)「大 1256, 15-2, 社会部, 社会教育 比企郡八和田村青年団ニ関スル調査要項」埼玉県立文書館所蔵